

和歌山県広川町に見た 防災の原点

安政南海地震（1854年）の際の 大津波から村人を救った濱口梧陵

山本哲朗

YAMAMOTO Tetsuro

正会員

山口大学教授 工学部

書物の取持つ縁

著者は昨年、『嵐の中の灯台親子三代で読める感動の物語』（明成社，2001）を読み、その中の主人公である濱口五兵衛が安政南海地震（1854年，M 8.4）の際に津波から村人を救ったことに感動を覚えた。この物語に出てくる濱口五兵衛こそが濱口梧陵である。現実には、かれは日没の中、道端に積んである稲むらに火をつけ、津波の中で漂流している村人に安全な避難場所を知らせた。この濱口梧陵の機敏な行動こそ、地域における真の意味での防災であるといえることができる。

2002（平成14）年11月2日には、濱口梧陵ブロンズ像の除幕式が耐久150周年記念行事として和歌山県湯浅町にある県立耐久高校において執り行われた。この高校の前身は1852年に濱口梧陵らが文武両道を目指して創立した稽古場（後の耐久舎）である。翌日の3日には濱口梧陵の誕生した隣町の広川町大字広での第100回目の津浪祭が執り行われた。

著者は両行事に参加し、その様子と濱口梧陵の偉業、さらには広川町の防災への取り組みを紹介する。

濱口梧陵

濱口梧陵（文政3（1820）～明治18（1885）年）は紀伊国有田町広村（現在の和歌山県有田郡広川町）で生誕し、七太と称される。天保2（1831）年、12歳のときに濱口本家の養嫡子となり、儀太に改名し、下総国（現在の千葉県）に赴く。梧陵はヤマサ醤油の醸造業に従事した。15歳のとき元服し、儀太郎と名を改める。家業に携わる一方、武術や詩文に励み、文武両道の修行を重ねた。20歳のとき湯浅村（現在の和歌山県有田郡湯浅町）の池永右馬太郎の娘まつと結婚する。再び銚子に戻った梧陵は、終生の師、三宅良斎と出会い、彼から西洋事情を教えられる。

嘉永4（1851）年に江戸から帰郷し、広村宗義団を興し、翌年に梧陵は濱口東江^{とうこう}、岩崎明岳^{めいがく}とともに広川村田町に文武を教授する稽古場（後の耐久舎）を設立し始めた。34歳（嘉永6年）のときに儀兵衛と改名し、家督を相続した。

安政元（1854）年12月24日に発生した南海地震（M 8.4）の際、広村において暗闇の中、津波に巻き込まれた村人を救出するために梧陵は道端に積まれていた稲むらに火をつけて安全な場所を知らせた。後述するように、この話は「稲むらの火」として物語化された。さらに、広村の津波被災後、梧陵は全力をあげて村人の救済に奔走し、翌年まで被災した村人の救済事業を進める。一方で安政2年に浦組を結成し、天下の国防を強化するために農家・漁家の荘丁を集めて訓練に従わせた。

明治13（1880）年、61歳のとき和歌山県会開設とともに初代県会議長に就任する。明治17（1884）年に渡米し、翌18年にニューヨークのピンセント病院で永眠した。享年66歳であった。

濱口梧陵ブロンズ像除幕式

11月2日（土）11時から全生徒数890名の和歌山県立耐久高等学校創立150周年記念行事の最初のものとして、濱口梧陵ブロンズ像の除幕式が開催された。来賓の中には耐久高校との姉妹校であるアメリカのケンブリッジ高校、ニュージーランドのケリケリ高校および中国の広雅高校から合わせて12人の関係者が見えられた。耐久高校の前身である稽古場を設立した一人である濱口梧陵は、佐久間象山、勝海舟と親交を深め、欧米諸国に関心を抱いており、耐久高校と外国の高校との交流には浅からぬ因縁を感じた。耐久高校のある和歌山県有田郡湯浅町は県中西部に位置する。

江戸時代末期の嘉永5（1852）年、濱口梧陵は濱口東江、岩崎明岳と一緒に耐久高校の前身である稽古場（後の耐久舎）を広川村田町（現在の広川町で湯浅町の南に位置する）に創設している。それから数えて耐久高校の歴史は本年が150年目に当たる。耐久舎は現在、広川町の耐久中学校校門近くに再建されている（写真1）。

除幕により現われた高さ3.05mの大ブロンズ像濱口梧陵は、威厳に満ち厳格な顔つきであるとともに、人々に温かみや希望を与えてくれる顔つきの持ち主として私には映

った(写真-2)。多くの来賓の祝辞の中で、梧陵の孫の孫に当たる千葉県銚子市在住のヤマサ醤油社長の濱口道雄は、「梧陵のように、世間で敬われ、評価してもらえる者は少ないのではないか」と話した。

大津波から村人を救った濱口梧陵の伝説

安政元年の安政南海地震の際、紀伊半島に大津波が来襲した。その際、海岸沿いに住む紀伊国宍粟郡有田町広川村(現在の広川町大字広)において濱口梧陵は大津波の中を漂流している村人を、道端に積まれていた稲むらに火をつけることで安全な場所に誘導し、津波から村人を救助した。その津波の波高は8mであったと推定されている。この津波を受けて広村では死者36人、家屋流出125戸、家屋全壊10戸等といった被害があった。

この話は尋常小学第五年国語読本巻十(文部省)の第十に「稲むらの火」(作者 中井常蔵)として掲載された。たぶん、全国的にもこの話は有名になり、美談として語り継がれたに違いない。写真-3には、その作品の最初のページを示す。この作品の写しは耐久中学校校庭内の建て看板や広川町庁舎前の「稲むらの火」広場の看板にも記されている。なお、この地震の32時間前には被害が関東から近畿地方までに及んだ安政東海地震(M8.4)が発生している。このときの津波に対して、梧陵は村人を高台に避難させている。

特に海岸沿いに発生する大地震の時に起きる津波という自然災害から村人を救った梧陵の才覚・機敏さ・英断には感動を覚えるとともに心から拍手を送りたい。地域住民が自然災害に巻き込まれないようにする活動を進めたい著者にとり、この梧陵の俊敏な行動には時代を超えて教えられることがあまりに多い。

広村堤防

安政元(1854)年の大津波を経験した翌年から濱口梧陵は濱口喜右之門と語り、紀伊国宍粟郡有田郡広川村に大堤防堤の構築に着工し、安政5(1858)年に完成させた。国指定史跡「広村堤防」である。堤防は天端幅2m、高さ5mで、長さ600mにも及ぶ。現在、コンクリート枠により堤防は補強されているが、築造時の形態は今でも保持している(写真-4)。梧陵は私財をも投じ、延人員56736人を要して、この堤防を完成させた。梧陵は村人が1年前に経験した津波災害に再び巻き込まれないようにするために並々ならぬ熱意をもち防災対策に取り組んだことを窺い知ることができる。

この堤防の堤体には防風林としてマツのほかに、村人が生活資金を得るために蠶をとるハゼが植え込まれている。



写真-1 濱口梧陵らによって設立され、文武を教授した稲古場



写真-2 濱口梧陵ブロンズ像



写真-3 小学国語読本巻十(文部省)の第十に掲載された「稲むらの火」(作者 中井常蔵)



写真-4 濱口梧陵が私財を投じて建造した広村堤防

津浪祭

11月3日(月)9時から広川町大字広で津浪祭が開催された。今回は節目の100回に当たった。祭りの式典は紀伊水道奥の入江の埋立地において挙行された(写真-5)。

この広の土地は宝永4(1707)年、さらに安政元(1854)年に大津波を受け被災している。後者の大津波は前述したように安政南海地震に伴い発生した。普通であれば、入江に面した低地にある広村では大惨事になるはずであるが、前述したように機転の利いた梧陵の行動によって村人が救われた。

津浪祭の式典は来賓、関係機関各位をはじめ、耐久小・中学校生徒合わせて182人の参加者の中で厳かに始まった。最初に、梧陵が安政東海地震時の津波の際に村人を避難させた高台にある広八幡神社宮司の佐々木公平による祝詞があり、広を津波から防ぎ、津波で犠牲になった人の霊が弔われ、また広の発展が祈願された。

来賓の祝辞では、異口同音に濱口梧陵が村人を大津波から救ったことに対して感謝の気持ちが述べられた。広川町長石原久男はこの津浪祭の経緯に触れ、津浪祭には濱口梧陵が防波堤を築いたことに対する感謝の念が引き継がれていると話した。さらに、津波という自然現象に畏敬の念を表わし、今叫ばれている南海地震による津波について警鐘した。最後に感恩碑前で記念植樹があり、町の木のアラカシの成木が植えられた。

広川町広における津波・高潮へのハード対策

津浪祭の式典会場のすぐ前を走る県道23号線御坊湯浅線沿いには、高潮防止のためにコンクリート製防波堤が建造され、それには“津波”と“稲むらの火”の壁画が描かれていた(写真-6)。またこの道路から民地に入る広村堤防には津波対策としてのゲート(赤門)が設置されていた(写真-7)。

このような津波、さらには高潮対策として構築された建造物を見るにつけ、広川町は過去の津波による苦い経験と梧陵の偉業を引き継いでおり、防災の意識が高い町である。防災の原点を教えられた町である。

むすび

著者は最近、地域住民レベルの防災活動に力を注ぎようとしている。自然災害に対する防災や減災において偉業を残した濱口梧陵のような人物の偉業を伝承していくことは、地域防災を進めるにあたり、地域住民が自然災害を考える一つの場になるのではないかと考えている。

本稿執筆においては、和歌山県広川町発行の『稲むら燃ゆ - 海嘯と闘った男・浜口梧陵の軌跡』(1998(平成10)



写真-5 広川町大字広で催された津浪祭



写真-6 広川町県道23号線沿いの高潮対策のためのコンクリート製防波堤に描かれた津波・稲むらの火の壁画



写真-7 広川町大字広に設置されている津波防止用のゲート(赤門)

年)、および浜口梧陵翁五十年祭協賛会の『濱口梧陵小傳』(1934(昭和9)年)を参考にした。

謝辞

両行事の参加にあたり、耐久高校長藪添泰弘氏をはじめとする教職員の方々および広川町役場の職員の方々にお世話になりました。また広川町中央公民館長の清水勲氏(元耐久中学校長)には梧陵に纏わる場所を案内していただいた。これら皆様に対して感謝の意を表します。

(2002年11月25日・受付)